児童の文学

一九二〇年十月二十六日北京孔徳学校での講演

今日お話しします児童の文学とは、言葉を変えますと“小学校での文学”ということになります。アメリカのスカダー(H.E.Scudder)、マクリントック（P.L.MaClintock）[i]などにはこうした名前の本があり、文学の小学教育上での価値を説明しています。彼らは児童は文学作品を読むべきであって、商人たちのずさんな読本を読むだけではいけないと考えています。読本を読むのは、文字を識ると言いますが、読書はできません。なぜなら読書の趣味がないからです。この言葉は間違っていません。わたしも同じ標題を使おうと思いましたが、誤解、小学校の児童に高邁な文学作品を読ませようとしていると思われる、誤解を恐れて、今のように変え、ここにいう文学とは、単に“児童の”文学を指すにすぎないことを表明しておきます。

以前の人は児童について多く正当な理解が来ませんでした。子どもを縮んだ成人とみなして、“聖経賢伝”を思い切り灌注するのでなければ、不完全な小人とみなして、子どもに何がわかるもんかと言って、一筆で抹殺し、相手にしませんでした。近頃ようやく児童は生理・心理上、大人とはいささか違うけれども、彼はもとより完全な個人であり、彼自身の内外両面の生活を持っていることが分かってきました。児童期の二十何年かの生活は、一面ではもちろん成人の生活の準備でありますが、一面ではやはり自ずから独立した意義と価値があります。なぜならすべての生活はただ一つの成長であって、わたしたちはどれか一時期を切り取って、これが真正の生活であると指定できないからです。わたしは自然に順応した生活の各時期、――生長、成熟、老死はすべて真正の生活であると考えます。したがってわたしたちは児童は縮小した成人であると誤認した教え方に対しては、もちろん完全に反対しますし、児童の独立した生活を認めない意見も、正しくないと考えます。全く蔑視するものは言うまでもありませんが、詩歌では群になることを鼓吹し、物語で愛国を提唱し、もっぱら将来のために考え、現在の児童の生活の必要を顧みないやり方も、児童の時間を浪費し、児童の生活を毀損することになります。わたしは児童の教育は、その内外両面の生活の必要によって、その分にふさわしく供給し、その生活を満足させ豊富にさせることだと思います。その供給した材料と方法によって生じた効果に至っては、当然多くの副産物ですが、供給するときの唯一の目的物である必要はないと思います。言い換えれば、児童の生活に文学の必要があるから、わたしたちは彼に供給する、その機会を利用してある種の効果――児童の将来の生活に有益な思想や習性――を得るのですが、これは副産物であって、決してこの効果を得ようとして、児童の必要のいかんを問わず、ある種の食料を供給し、強迫的に飲み込ませようとするのではありません。だから小学校での文学の教材や教授は、第一に“児童の”という点に注意すべきで、その次がはじめて効果であって、読書の趣味、知恵・感情や想像という教養などです。

児童の生活にはどうして文学が必要なのでしょうか。この問題は、文学の起源の情況を見さえすれば、はっきりします。児童はどこに自分の文学を持っているのでしょう。この問題は、原始

社会の文学の情況を見さえすれば、はっきりします。進化論によりますと、人類の個体発生はもともと系統発生の過程と同じです。胚胎の時代に生物進化の歴程を経て、児童時代にまた文明発達の歴程を経ます。したがって児童学（Paidologie）の多くの事項は、人類学(Anthropologie)上の事項を借りて説明とすることができます。文学の起源は、もと原人の自然に対する畏怖と好奇により、想像に任せて、ある種の感情と思想が形成され、言語・行動を借りて表現され、総じて歌舞と言われ、分かれて歌・賦と戯曲小説となりました。児童の精神生活はもともと原人と似ていて、その文学はわらべ歌・童話であります。内容形式は多くが原人の文学と同じであるばかりか、多くはまだ原始社会の遺物でありまして、常に野蛮あるいは荒唐な思想を含んでいます。児童と原人の比較、児童の文学と原始の文学との比較は、現在すでに定論がありまして、余計なことを言うことはありません。わたしたちが注意しなければならないのは、ただどのようにすれば適切に“児童の”文学を児童に供給することができるのかということです。

ちかごろ多くの人が児童の文学については、どうしても懐疑的な傾向にあります。というのは彼らはわらべ歌・童話の中に多くの荒唐無稽でたらめな思想があると思っているため、児童に有害だと恐れているからです。この危惧はもともと無理からぬものがありますが、わたしたちにはそれを解くことのできる、二つの根拠があります。

第一に、わたしたちは児童には独立した生活があることを認めます。つまり彼らの内面の生活は大人とは違うということです。 わたしたちは客観的に彼らを理解し、そしてそれ相当に彼らを尊重しなければなりません。赤ん坊はご飯を食べられませんから、かれらには乳を与えるしかありません。歩けませんから、抱くしかありません。これは誰でも知っています。精神上の情況も、まさしくこれと同じです。児童は一人として拝物教でないものはありません。彼らは草木が考えることができ、犬猫が話せるのは、まさに当然の事であると信じています。わたしたちはそれを糾正しようとして、草木は植物で犬猫は動物で、考えたり物を言ったりすることはできないと言いますが、これは何の益もないばかりか、かえって有害なのです。というのはそうすれば彼らの生活を傷つけてしまうからです。たとい児童の権利云々を言わないとしても、不自然に児童の想像力を抑圧して、やはり失うところが大きいのです。

第二に、わたしたちはまた児童の生活が、どんどん変わって成長することを知っています。そのために、わたしたちは大胆に児童に必要な歌や物語を供給することができ、彼が何か悪い影響を受けるのではないかと心配することはありません。だがそれによってわたしたちはまたさらに細心に斟酌して、彼らが停滞して、正しい軌道を外れないようにしなければなりません。例えば赤ん坊は歯が生えてご飯が食べられるようになり、足に力がついて歩くことができるようになります。それなのにまだ乳を飲まし抱っこをしていては、彼の胃腸と足の筋肉を反って弱めてしまうことになります。児童が犬猫が話をすると信じているときに、わたしたちが彼らに犬猫が話をする物語を話してやると、彼らを喜ばせるばかりか、またこの過程が跳び越せない――しかしながらまた自然に推移するものであることが分かるので、適宜に対処すれば、児童が犬猫がどんなものであるかを知りたくなったときに、わたしたちは生物学の知識を彼らに与えてやればいいのです。もし児童の生活の変化のいかんを問わずに、終始彼らに犬猫が話をする物語を聞かせるだ

けなら、その時こそそうした荒唐誤謬の弊害が本当に出てくるでしょう。

マクリントックによりますと、児童の想像がもし抑圧されますと、彼は一切の興味をなくしてしまい、面白みのない唯物（ただもの）的な人になってしまいますが、放っておかれたなら、また夢想家になり、彼の心力はすべて役に立たなくなると言います。だから小学校での正当な文学教育には、三つの働きがあります。（１）児童の本能的な興趣と趣味に順応し満足させる。（２）そうした趣味を培養しそして指導する。（３）以前になかった新しい興趣と趣味を喚起する。この（１）はつまりわたしたちの言う児童文学を供給することの本意です。（２）と（３）はその機会を利用して一種の効果を上げるのです。だがどうやったら適切にやることができるでしょうか？児童心理の発達の過程と文学批評の基準によって、教材選択と教授方法に、注意すれば、当然若干の効果は得られるでしょう。教授方法のことは余計なことは言う必要はないでしょうから、いまはただ教材選択について、ざっと説明して参考に供します。

児童学での分期は、だいたい四期に分かれます。一嬰児期（一歳から二歳）、二幼児期（三から十）、三少年期（十から十五）、四青年期（十五から二十）です。わたしたちがいま言うのは学校の一年から六年までの児童で、つまり幼児期及び少年期の前半です。七年以上のいわゆる中学程度の児童については、今回は言及する暇がありませんので、別の機会を待ってお話しすることにします。

幼児期は普通また前後の二期に分けます。三歳から六歳を前期とし、また幼稚園時期とも言います。六から十までが後期で、また初等小学時期とも言います。前期の児童は、心理発達上もっと旺盛なのは感覚作用です。その他の感情意志の発動も多くは感覚を基とし、衝動的な性質を帯びています。この時期の想像も、受動的なものにすぎず、すなわち連想及び模倣の二種で、現実と虚構については、ほとんど何の区別もありません。後期になると、観察と記憶作用が次第に発達してきて、さまざまな現実の経験を得て、想像作用も制限を受け、現実とは衝突しないようにしなければ、受け入れられません。表現の面でも、主動的になって、つまりいわゆる構成的想像になります。少年期の前半も大抵がこのようですが、自我意識がもっと発達して、社会道徳等の観念についても、次第に理解するようになります。

ほぼこの順序を根拠に、わたしたちは各時期の児童の文学を分けてみますと、だいたい次のようになります――

幼児前期

（１）詩歌　この時期の詩歌は、第一に注意しなければならないのは声調です。最も良いのは今あるわらべ歌を使うことで、北京の「水牛」、「子ねずみ」など皆使うことができますし、韻を踏んでできた「突然聞こえた門の外、人が犬を咬んだ」でも、呪文のような鬼決め歌の「鉄脚斑斑（ティエジアオバンバン）」でも、音節が面白ければ、同じように使えます。なぜなら幼児の唱歌は耳に快ければいいので、内容の意味はそれほど重要ではないからです。でも粗俗な歌詞はやはり排斥しなければなりません。だから詩歌の選択は積極的に名著を並べる必要はありません。ただ消極的に選択するだけでよいのです。古今の詩には適当なのもあって、当然使えます。でも特に新しく作ったわらべ歌は、わたしはあまり賛成ではありません。と言いますのはこれは極めて難しく、成

功し難いからです。

（２）寓言　寓言は実は童話の一種ですが、省略して簡単短小になっていて、また多く教訓の意を含むのを、ふつう寓言と称するにすぎません。幼児教育では、その価値は単に物語の内容にあります。教訓は実はあってもなくてもよいのです。もしこの意味さえはっきりしていて、児童自身が理解できれば、それでよし、もしこれを借りて修身の大道理を教えようとするなら、間違うことになりましょう。これはこの時期に教えても理解できないばかりか、曲解の癖を養い、将来にすこぶる弊害が出る恐れがあります。象徴的な著作は少年期後期（第六七年）にならなければ、読ませても益がないでしょう。

（３）童話　童話も元からある材料を利用するのが最もよろしい。しかしいまのものはまだ誰も収集した人がなく、古書の中のものは校訂を待たねばならず、ちょうど頃合いの使える童話集がありません。外国のものを翻訳するのも一法ですが、ただ吟味選択をすることが大事です。本来童話には原始的な野蛮な思想制度が保存されていて、他よりずっと多いのです。わたしたちは児童は小さな野蛮人で、荒唐でたらめなお話を喜ぶと言いましたが、もともと当然なのです。ただいくつか注意せざるを得ないことがあります。つまりおよそ悲哀、苦痛、残酷に過ぎるものは、採用すべきではありません。神怪の事は恐怖の限度を超えさえしなければ、まだよいでしょう。そのうち理知が発達すると、児童は自然とそうしたものを信じなくなりますが、もし悲哀あるいは苦痛が過ぎれば、いつまでも脳裏に印象を残し、消えることがなく、のちの思想にもとても影響しますし、残酷の害に至っては、むろん言うまでもありません。

幼児後期

（１）詩歌　この期間の詩歌は形式が重要なだけでなく、内容もとても重要になります。読んでもちろん耳に快くなければなりませんが、そのうえ面白く、趣味がなければなりません。わらべ歌も応用できます。前期で読んだのを重ねて読んでもよろしい。前回はその音を聞きましたが、今度はその文字と意味を知るのですから、別の興趣があります。文学の作品にもし採用できるものがあれば、極めて適当ですが、ただそれほど多くはないでしょう。もし新詩を取るなら、韻を踏んで声調が整ったものでなければなりません。ただし詞曲小曲〔小唄端唄〕調のは取らず、抽象描写あるいは道理を述べたものも採りません。児童は最も創造的ではありますが、また最も保守的であります。彼らが喜ぶ詩歌は、おそらくまだ五七言以前の声調でしょう。だから普通の詩は彼らの鑑賞を受け付けにくい。将来の新詩人が時代を超越して、あらためて自然の音節を尋ねあてることができるなら、その時こそ本当に新しいわらべ歌が生まれるでしょう。

（２）童話　小学の初年はまだ普通の童話が使えます。しかしこれからは児童の識別力が次第に強くなりますから、現実と虚構についてはすでに境界がわかっていますので、童話の中の想像もあまり現実と離れることはできません。デンマークのアンデルセン（Hans C. Andersen）の書いた童話集の中には、たくさんの適切な材料があります。伝説も応用できますが、ただ注意すべきことは、過度に英雄崇拝の考えを鼓舞し、あるいは粗暴残酷な行為を助長してはなりません。中国の小説の『西遊記』は神怪の事を述べていますが、『封神伝』とちがって、純朴率直ということになりますから、何節かは童話として使えるでしょう。『今古奇観』などの書にも取るべきと

ころがありますが、校訂を加えなければ適用できません。

（3）自然の故事　これは寓言の変形です。以前に寓言を読んだのはその物語のためでした。今度はそれが語る動物の生活のためです。児童はこの時期、好奇心が最も旺盛になり、牧畜及び園芸についても極めて熱心ですから、こうした物語を読ませれば、そのあと自然を記述した著作に導くのは、とても容易になります。だが中国のこの類の著作は非常に少なく、材料を翻訳書、たとえば『万物一覧』[ii]などの書に取るしかありません。

少年期

（1）詩歌　わかりやすい文言なら応用できます。唐代の楽府や古詩のなかにはよい材料がたくさんあります。中国には叙事の民歌（Ballad）が欠けていて、佳作に入るのは「孔雀東南に飛ぶ」など何篇しかありません。「木蘭行」はあまり適用できません。この時期の児童は普通のわらべ歌に対しては、大抵もうなんの興味も持っていないでしょう。

（2）伝説　伝説は童話と似ていて、ただ記されるのが有名な英雄であり、やはり空想の分子は含みますが、比較的現実に近いです。自我意識・団体精神が次第に発達する時期で、こうした物語は、すこぶる適切です。だが容易に不適当な英雄崇拝と愛国心を引き起こしますから、極めて注意する必要があります。最もよいのは各国の材料を採用することで、児童に人間性の中に共通するところがあることを理解させて、多くの偏見を免れることができます。奇異にして趣味があるもの、あるいは真切にして人情に合うものなら、皆採用してよろしい。しかし明の太祖やナポレオンの物語は、使わない方がよいでしょう。

（3）写実の物語　これは現代の写実小説と違い、単に多く現実的な分子を含む物語を指すにすぎません。たとえばヨーロッパの『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe) あるいは『ドン・キホーテ』(Don Quixote) などです。中国のいわゆる社会小説にも、取るべきところはあります。たとえば『儒林外史』や『老残遊記』の類は、叙事叙景ともによろしい。だが玩世の口吻があるのは要りませんし、また誇張あるいは感傷的な“雑劇的”な気味があるものもいけません。『官場現形記』や『広陵潮』がなんの取るところもないのは、つまりこのせいです。

（4）寓言　この時期に寓言を教えるには、意味に注意するとよろしい。児童の理知の発達を助けるのです。ギリシア及びそのほかのヨーロッパの寓言作家の作品は、いずれも選択して使えます。中国の古文及び仏経のなかにも多くのとてもよい比喩があります。でも寓言の教訓は、多くが経験から来たもので、理論によったものではありませんから、頑冥あるいは不合理な話がいっぱいありますから、使うときは注意が欠かせません。また編末には大抵訓話がついていていますが、削ってしまって、児童に自分で考えさせるとよろしい。指定すると反って彼らの活動を妨害することになります。滑稽な物語はこの時期も使えます。童話の中にももともとこの類のものがありますが、この時に使うのはやはり意味に重きをおくだけです。『韓非子』などの古書の中にも、すこぶる使える材料があります。たいていは理知的な滑稽、つまりいわゆる機智に属します。感情的な滑稽は実例が少ないです。世俗の大多数の滑稽はすべて感覚的ですが、文学的価値はありません。

（5）戯曲　児童の遊戯の中にはもともと戯曲の原質が含まれています。今はそれが拡張綜合し

て、彼らの必要に適応するにすぎません。ここでは、彼らは模倣及び構成の想像作用を発揮し、団体遊戯の楽しさを得ることができます。これは実演を指していうのですが、誦読でも別の興趣があります。だがこうした類の著作は、中国には一篇もありませんから、誰かが研究創作してくれるのを待つしかありません。読む伝説を戯曲化するのが、もとは最も好いのですが、また極めて難しい。だからまずは翻訳から始めるしかありません。

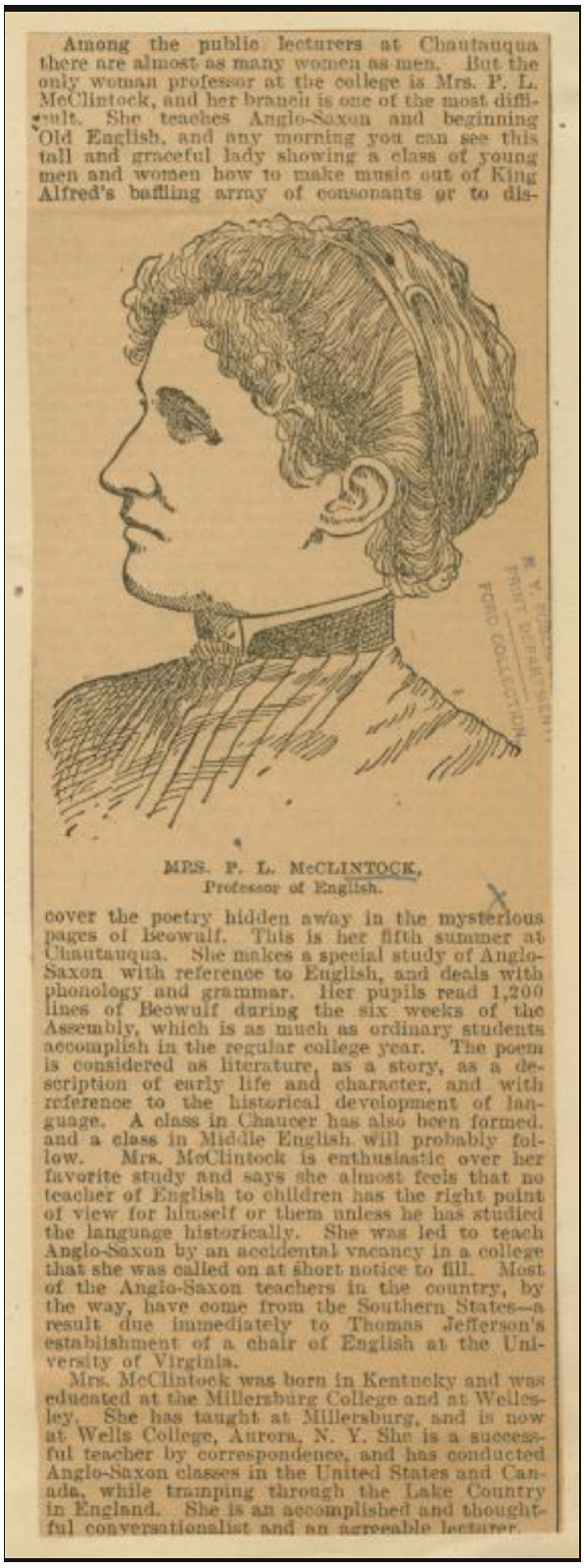
以上ざっと児童の各時期、配分・応用する文学の種類について述べましたが、まだ理論上の空談に過ぎませんから、実験を経ないと、確実に詳しい表を編成することはできません。これまで述べたのはおおく“児童”に偏重していましたが、“文学”という点についても疎かにはできません。児童の必要とするのは文学であって、決して商人がずさんに作ったいろんな文章ではありませんから、選択使用の場合は況してや文学的価値に注意すべきです。いわゆる文学的とは、決して文学批評の条目を引いて、細々と推敲するのではなく、文学趣味が必要だと言うにすぎません。文章は単純で、明白で、均整が取れていて、思想は真実で、普遍的である、これで条件はすでに完備しています。マクリントックは、小学校の文学は二つの重要な作用がある、（１）具体的なイメージを表現する、（２）組織的な全体を構成する、ことです。文学が児童の新しい興趣と趣味を養い、指導し、喚起することができる所以は、ほとんどがこの作用によるのです。だからこの二つの条件は、ほとんど児童文学の芸術上の基準とすることができるのだと言います。

中国は従来児童に対しては、正当な理解がありませんでした。また文学に偏重したために、文学の中で児童の用に供給できるものは、実際ほとんどありません。しかし民間で口頭で流伝するものも少なくなく、古書の中にも使える材料はあります。ただ採集したりあるいは校訂したりして、それを応用する人がいません。坊間にはいくつか唱歌や童話がありますが、多くは条件に合わず、使うには適切でありません。わたしは希望しますが、誰か熱心な人が、小さな団体を作って、研究を始め、次第に各地の歌謡・物語を収集して、古書の中の材料を校訂し、外国の著作を翻訳し、何部かの本に編成して、学校や家庭向きに提供するとともに、一方また児童用のパンフレットを編んで、優美な装幀で、出版してくれれば、児童教育に多くの効果が上がるでしょう。わたしは以前漢字が難しいから、この事はそれほど成功はたやすくないと思っていましたが、今では注音字母ができ、余計な心配はしなくて済むようになりました。だが挿絵の事は、やっぱり難しい。今の中国の画報上の挿絵は、ほとんど一枚として合格するものはありません。児童書に挿絵をかける人を探そうとしても、むろんもっとたやすくはありません。これは本当に残念な事です。

※初出：1920 年 12 月 1 日『新青年』第 8 巻第 4 號

---

[i] Literature in School, 1888.　Horace Elisha Scudder(1838～1902) アメリカの作家。
マクリントック　英語の綴りに誤りがあるようだ。P. L. McClintock と思われるがこの人に関する資料は少なく、書物の名前もわからない。インターネット上に次の資料を見つけた。



Among the public lecturers at Chautauqua there are almost as many women as men. But the only woman professor at the college is Mrs. P. L. McClintock, and her branch is one of the most difficult. She teaches Anglo-Saxon and beginning Old English, and any morning you can see this tall and graceful lady showing a class of young men and women how to make music out of King Alfred's baffling army of consonants or to dis-

MRS. P. L. McCLINTOCK,
Professor of English.

cover the poetry hidden away in the mysterious pages of Beowulf. This is her fifth summer at Chautauqua. She makes a special study of Anglo-Saxon with reference to English, and deals with phonology and grammar. Her pupils read 1,200 lines of Beowulf during the six weeks of the Assembly, which is as much as ordinary students accomplish in the regular college year. The poem is considered as literature, as a story, as a description of early life and character, and with reference to the historical development of language. A class in Chaucer has also been formed, and a class in Middle English will probably follow. Mrs. McClintock is enthusiastic over her favorite study and says she almost feels that no teacher of English to children has the right point of view for himself or them unless he has studied the language historically. She was led to teach Anglo-Saxon by an accidental vacancy in a college that she was called on at short notice to fill. Most of the Anglo-Saxon teachers in the country, by the way, have come from the Southern States—a result due immediately to Thomas Jefferson's establishment of a chair of English at the University of Virginia.

Mrs. McClintock was born in Kentucky and was educated at the Millersburg College and at Wellesley. She has taught at Millersburg, and is now at Wells College, Aurora, N. Y. She is a successful teacher by correspondence, and has conducted Anglo-Saxon classes in the United States and Canada, while tramping through the Lake Country in England. She is an accomplished and thoughtful conversationalist and an agreeable lecturer.

[ii] 『万物一覧』　未詳。